令和４年度　新川みどり野高等学校アクションプラン　―１―	
重点項目	学習活動（学習指導）
重点課題	生徒の実態に即した適切な受講登録とわかる授業の確立
現　状	・本校には不登校経験者が多く、基礎学力が定着していない生徒がいる。 ・様々な理由から、転入学生や編入学生が多くいる。 ・進路希望は就職希望から四年制大学への進学まで多岐にわたる。 ・学習への目的意識に乏しく、安易な欠席や遅刻が見受けられる。 ・互見授業等の校内研修を実施しているが、生徒へのフィードバックに課題が残る。
達成目標	講座出席率と単位修得率
	講座出席率85％以上　単位修得率85％以上
方　策	・不登校生徒や学習習慣が身に付いていない生徒が授業に参加できるように、学校全体で学習の支援にあたる。 ・多様な生徒のニーズに応じた、弾力的な教育課程の編成に努める。 ・HRや面談を通じ、一人一人の目的に沿った無理のない受講登録を勧める。 ・生徒、教員（担任・授業担当者）、保護者との連携をとっていく。 ・ICT機器の推進を図り、タブレット端末等を活用した教材開発に努める。 ・教科内や教科を横断して学習活動や指導方法の工夫を図り、生徒が主体的に参加できるように、わかる授業の実践に努める。
達成度	前期講座出席率　83.6％　　前期単位修得率　80.2％
具体的な取組状況	・年間指導計画の中で、観点別学習のねらいと規準を教員と生徒の中で共有し、生徒が主体的に学べるように授業に工夫を凝らした。 ・少人数授業や習熟度別授業の中に中学校の振り返りを取り入れながら、生徒一人一人に応じたきめ細やかな指導を行った。 ・旧課程から新課程への移行の中で、年次、夜間や各教科と連携を図りながら、生徒一人一人が自己実現できるような教育課程の編成に取り組んだ。 ・技術支援員による校内研修やデジタル教科書を活用した授業研究を行うなどICT機器の活用を推進した。 ・教科を横断して授業を参観する互見授業を行ったり、教科内で指導の改善点や指導方法を協議したりして授業改善に取り組んだ。
評　価	C
学校関係者の意見	・不登校生徒には部活動や学校行事等で登校のきっかけを提供してほしい。担任は生徒理解のために、学年だけでなく部活動顧問、SC等のいろいろな立場の教職員とも連携を取り、登校を促す努力を続けてほしい。 ・互見授業を充実させるなど、学校全体で授業改善に取り組み、単位修得につながる支援を考えてほしい。 ・令和４年度の達成目標はこれまでよりも高い設定となっている。85％の達成目標は高すぎたのではないか。
次年度へ向けての課　題	・多くの教科でICTを活用した授業を実践し、生徒の取組方にも変化が生まれている。今後は、次年度に向けて改善点と問題点を検証し、これまで以上にわかる授業へ繋げていく必要がある。 ・互見授業に柔軟性が欠け、生徒へのフィードバックに課題が残る。実施方法等を再考し、授業改善に生かせるように工夫する必要がある。

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ:現状より悪くなった。）

令和４年度　新川みどり野高等学校アクションプラン　―２―		
重点項目	学習活動（福祉教養科）	
重点課題	社会福祉に対する興味・関心の向上と基本的知識・技術の習得、及び思いやりの心の育成	
現　状	・１年次生から実習・体験、専門家による講義等を計画的に取り入れ、福祉に対する興味・関心を高めながら、福祉マインド（思いやりの心・自主性・協調性）を育成している。 ・今年度の介護職員初任者研修の受講生は０名(対象生徒２名中)である。 ・福祉を学び、昨年度卒業後に福祉系へ進んだ生徒は３名(５名中)であった。	
達成目標	①　「学校生活・福祉についての自己評価表」で各項目が向上した生徒の割合（現状維持を含める） ②　里孫活動への参加率（校内外活動を含む）	
	①　80%以上　②　80%以上	
方　策	・基本的生活を確立した学校生活を送るために定期的に担任との面談を行う。 ・生徒の個々の福祉マインド（思いやりの心、自主性、協調性）の育成を図るために、授業をはじめ体験学習、里孫等のボランティア活動等を積極的に行い、知識や技能、態度を身につけ、専門性を深めるとともに、自らが福祉を学ぶ意義について考える機会を設ける。 ・１年次生から介護職員初任者研修の資格取得に向けた働きかけを行う。 ・前期と後期に生徒の自己評価表を用いた調査を見直し、実施する。	
達成度	①　77.8%（7人／９人中）　②　校外88.9%　校内100%	
具体的な取組状況	・「生活態度・福祉についての自己評価表」を活用し、担任・年次・教科間の連携を図り、個別指導を強化してきた。 ・福祉教養科の全生徒に役割を与え、主体性をもって諸活動に取り組むよう指導した。里孫活動では、感染防御エプロンや里親さんへの作品を作り、定期的に届けた。また、定期的な施設交流の他、自主参加型の福祉施設でのボランティア活動を新たに実施し、活動の場や参加者を増やすことができた。 ・介護職員初任者研修は、新カリキュラムにより来年度の３年次生が対象となるため、福祉科目と家庭科目を横断連携し、３年次の福祉系・家庭系の科目・進路選択への対応や幅広い視野をもてるよう意識付けを行なった。 ・放課後を利用し、個別の科目補充や学習指導、進路指導を強化した。 ・学科のＰＲに関しては、カリキュラムの改訂により科の特色づくりや発信について検討を行なっている。	
評　価	①　B（ほぼ達成した）	②　A（達成した）
学校関係者の意見	・コロナ禍における活動制限が続く状況でも、オンライン会議等を活用するなどの工夫をすることで、施設利用者との交流活動は実施してほしい。 ・感染防御エプロンの作製活動は非常に有り難く、現場で日々使用している。今後もお願いしたい。	
次年度へ向けての課　題	・福祉教養科生徒の学力伸長のための学習補充、進路実現に向けた指導を個別に行う。 ・福祉教養科の行事の拡充と生徒の主体的な取組の推進、外部施設との継続的な交流を実施する。 ・新カリキュラム福祉科目と家庭科目による魅力ある福祉教養科の教育課程を編成する。さらに情報発信の仕方を工夫し、広報活動の推進を図る。	

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D:現状より悪くなった。）

令和４年度　新川みどり野高等学校アクションプラン　―３―	
重点項目	学校生活（生徒指導）
重点課題	・ルールやマナーを意識した学校生活 ・日常的にあいさつを交わす学校生活
現　状	・お互いに気持ちの良いあいさつができない生徒が多い。 ・場や状況に応じた言葉遣いが苦手な生徒がいる。 ・スマートフォンなどの利用マナーが悪い。 ・衣服の着こなしなどがルーズになる生徒がいる。 ・周囲への気配りができず自分本意の言動をする生徒がいる。
達成目標	①　学校ネットワークルールの見直しを生徒主体で行う
	②　学校内に気持ちよくあいさつを交わせる友人をつくる（100%）
方　策	・教職員の共通理解を深める ・生活委員会の活動活性化（執行部や他委員会との連携） ・生徒会執行部、生活委員会、代議員会を利用し、学校ネットワークルールについて考えさせる（生徒主体） ・身だしなみ基準の周知活動（生徒主体） ・毎日のあいさつ活動の設定（8:50～8:55フレッシュタイム）
達成度	①　生活委員を中心として現在取り組んでいる ②　83%
具体的な取組状況	①　学校ネットワークルールの見直しについて ・学校生活アンケート（生徒会執行部実施）の結果を基に「歩きスマホ見直し週間」を実施（生徒会執行部・生活委員会）した。 ・上記及び「スマートフォン等の利用等に関する調査(県実施)」の結果を基に問題点を確認し、「スマホコントロールウィーク」を実施した。 ・上記の取組により、生徒一人一人が各自のネット利用について考える機会を設定した。 ②　気持ちをよくあいさつを交わせる友人づくり ・学校行事等を通しての各年次で取り組んだ。 ・あいさつの習慣を意識・定着させるため、「あいさつ運動（前・後期）」、校内放送での呼びかけ等を実施した。
評　価	①　B　　②　C
学校関係者の意見	・インターネットやSNSを通して、高校生が事件や犯罪等に巻き込まれてもおかしくない時代となっている。ネットルール見直しに関連して、情報リテラシーを高める指導を考えてほしい。
次年度へ向けての課　題	①　ネットルールを生徒が意識しやすいように、また、実践しやすいように啓発活動を継続していくこと。さらに、生徒一人一人や各家庭にネット利用に関するルール作りをしてもらうために、次年度もネット利用について見直す機会を設定していくこと。 ②　学校生活全般において、なお一層良好な人間関係を築いていく機会を設定していくこと。

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D:現状より悪くなった。）

令和４年度　新川みどり野高等学校アクションプラン　―４―	
重点項目	学校生活（保健指導）
重点課題	睡眠状況の見直しと改善
現　状	・昨年度実施した睡眠アンケートから「不眠症の疑いがある」となった生徒が40％おり、一昨年よりも５％増加した。登校しても体調不良を訴える生徒の中には睡眠不足が不調の原因という自覚がある生徒もおり「改善したいが、どうしたら良いか分からない。」という意見もある。また、本校生徒のメディア利用の平均時間が約５時間ということが分かった。メディア利用の時間が長い生徒ほど就寝時刻が遅く、睡眠時間が短い傾向にあることが判明した。生徒の健康を考える上で、生徒自身が睡眠の重要性を知り、自ら生活習慣を改善しようという意識を向上させ、心身の健康増進に繋げていく態度を育成していく必要がある。
達成目標	睡眠状況を改善できたという生徒の割合が80％以上
方　策	・ＨＲ等で睡眠不足が与える心身への影響についての保健指導を行い、自分の睡眠状況を振り返ると共に、現状に応じた個々の目標を立てさせる。また、定期的に振り返りを行い、目標を意識付けできるよう関わる。 ・ほけんだよりや校内掲示物にて長時間のメディア利用が心身に及ぼす影響と共に、良い利用の仕方について知らせる。 ・生徒保健厚生委員や学校保健委員会を利用し、本校生徒の実態とより良いメディアとの関わり方について調査・発表する機会を設ける。家庭の意識を高め連携を図るために、保護者の出席も呼びかける。 ・チェック表等を記入させ、睡眠時間やメディア利用時間を一人一人に意識させる。 ・睡眠障害が疑われる生徒には、個別指導を行う。
達成度	睡眠状況が改善できたという生徒の割合は34％（10名） （不眠症の疑いがある生徒29人のうち）
具体的な取組状況	・６月と12月に生活習慣チェックと共に睡眠に関するアンケートを実施した。 ・ほけんだよりや校内掲示物にて長時間のメディア利用が心身に及ぼす影響とともに、良い利用の仕方について知らせた。 ・６月の睡眠チェック実施時はワークシートを用い、自分の生活習慣を振り返り、改善点を明確にできるようにした。チェックの結果は、個人の点数やチェック内容に合わせてコメントを記入し、個に応じた指導を行った。また、チェック点数が多い（不眠疑いの強い）生徒には個別指導を実施した。チェック点数が多い生徒は、継続的に睡眠に支障を感じている生徒が多く、勉強やその他の生活行動も含め指導し、必要に応じて受診や医療機関への相談についても指導した。
評　価	C
学校関係者の意見	・達成目標には届いていないが、29名中10名が改善できたことは成果があったと考えられる。 ・睡眠の改善については本人だけでは難しいので、次年度は保護者の協力を得ながら進めてほしい。
次年度へ向けての課　題	・メディア機器視聴時間が長い生徒ほど、睡眠に不満を感じたり支障をきたしたりしている。スマホやタブレット等の使い方を自ら考え、改善していく力を育成したい。 ・家庭と学校と連携しながら改善策を模索していきたい。 ・睡眠チェックをすることで睡眠への感じ方やメディア機器視聴時間について知り、個に応じた指導に生かすことができている。生活習慣や睡眠については継続的な指導が必要と思われるため、今後も継続して実施していきたい。

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ:現状より悪くなった。）

令和４年度　新川みどり野高等学校アクションプラン　―５―	
重点目標	進路支援（進路指導）
重点課題	生徒が主体的にキャリア教育のステップアップを目指しながら、目標に向かって実践できる進路指導（支援）体制を構築する
現状	・生徒はステップアップカリキュラムを意識する機会が少ない。 ・自らの課題を克服するための具体的な方法を、生徒自ら見つけることが難しい。 ・日頃の学校生活や行事の参加において、生徒によっては目標が的確ではない（又は目標に対する意識が低い）場合がある。
達成目標	生徒が的確に自己理解し、自らの課題について主体的に克服しながら進路実現を図ることができるよう支援体制の充実・改善を行う。
方策	・生徒が自分のステップアップの状況を把握する機会を定期的に設ける。 ・自らの課題について主体的に克服できるよう、関係する分掌、年次、スクールカウンセラー等と連携しながら学校全体で取り組む。 ・学期や行事毎にキャリアパスポートの作成に取り組むことで、生徒が主体的に自己の課題を克服するために、的確な目標を定められるようにする。
達成度	・今年度は運用に向けた準備期間であり、次年度以降の運用を目指す（当計画は次年度以降も継続実施を予定）。
具体的な取組状況	・生徒が自分自身の「スクール・ポリシー」、「進路ステップアップカリキュラム」、「ソフトスキル(日常生活やコミュニケーション、対人関係などにおける能力)」の到達度を自己理解する取組(「みどり野メソッド」)について、具体的な実施方法の調整を行った。（「みどり野メソッド」は、上記３分野(各10項目程度)がそれぞれStep1～3の段階に分かれており、生徒が自ら諸能力を自己理解し、卒業までにStep3に到達することを目標とし、自己の課題の克服や伸長を目指す。） ・「みどり野メソッド」の内容や活用方法について、多くの職員の意見を反映しながら調整を行い、次年度の運用に向けて準備を進めてきた。 ・次年度用の「進路のてびき」作成時に、生徒が主体的に進路実現を目指せるような工夫と、キャリアパスポートとして十分な活用ができるよう内容の精査を行った。
評価	C
学校関係者の意見	・今後も就職試験の受験先を決める際は求人票だけを見て決めるのでなく、就業体験への参加や複数の応募前職場見学をすることにより、実際に自分の目で見て体感して判断するよう指導してほしい。 ・次年度以降も福祉教養科の生徒が福祉分野への進学、又は就職をしてほしい。
次年度へ向けての課　題	・生徒の実態は毎年少しずつ変化するため、教員は指導内容を見直したり、新たな工夫をしたりする必要がある。ケース会議や全体研修会等を実施しながら、職員の共通理解のもと、「みどり野メソッド」が学校全体としての取組となるよう留意しながら進める必要がある。

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）